

## 働くとは本が読めない？

奈良 敏行

(笈の定有)

話題の本『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』(集英社新書)が二月一八日(二〇二五)の定有堂教室「読む会」の課題本だった。テーマがテーマなので熱い議論となった。

参加者は十五人くらいだったが、大部分の人が、帯文に惹かれたと言っていた。「仕事とスマホで一日を終えたくないあなたへ」という誰でもが心当たりのある心のうずきををえぐってくる。

「仕事」と「スマホ」で一日を終えるのが大多数の人の日常なのだ。昔は「本」を読んでいた。「本」を読まねばと言いつけられてきた。ふと気づくと本を手にしなない日常に生きている。講師の岩田直樹さんは、この「読めなくなるのか」の「なるのか」という自然な問いかけがとても成功していると指摘した。

ずいぶん本を読んでいない、なぜだろう？ この問いか

けがこの本の醍醐味なのだろう。

みんなの議論を聞きながら、自分でも考えてみた。「働いている」人は本が読めない。そして一方「本」を読み続ける人もいる。自分で出した結論は、「働いている現場では本を読む人が必要とされない」という皮相的な考えだった。「学校への反抗・労働への順応」と副題する『ハマータウンの野郎ども』(ちくま学芸文庫)もそういう切り口だった。働く人々は働くということの中に「かたまり」をつくっている。そこに介入する外部を嫌うのだ。

ちようどいま読んでるのが、『ヤンキーと地元』(ちくま文庫)だ。帯に教育学者と哲学者が推薦文を寄せている。どんなことでも言葉にすると、そうした外部を自分たちの理解に取り込んでしまう。沖縄で働くヤンキーたちの現場は「型枠解体屋」だ。型枠大工がコンクリートを流し込む。固まった後にその型枠を取り外す仕事だ。そこには言語的なマニュアルはない。先輩後輩の上下関係で「かたまり」を作り作業するので、所属する先輩が求める手順と方法で働けることが大事なのだ。経験のつながりで仕事をするので、外部的な知識の介入は否定される。外部的知識はむしろ、「かたまり」から追放される原因だ。

ここには読書と階級格差の現実も存在する。著者の三宅香帆という。

《読書しようと思う意思の有無に、社会の階級格差が影響を及ぼしている。》

かくして「教養」と「修養」が分けられる。教養はエリートが身につけるもの、修養はノン・エリートが身につけるもの、修養はノン・エリートが実践するもの、なのだ。修養は求められて労働者の内面を形成する。ここで求められるのはコミュニケーション能力の育成。しかしこれは労働者たちの「かたまり」を壊すものだ。コミュニケーション能力が高まるほど労働者はバラバラにされる。上級階級との潤滑なやりとりがコミュニケーションなのだ。働く人たちの「かたまり」は、円滑でない身体と身体に触れ合いで結論を作っていく。

啓発本の源流を求める本、尾崎俊介『アメリカは自己啓発本でできている』（平凡社）がある。主張を簡単にすると、「人間が心の中で願うことが、すべて実現する」という一言だ。これを引き寄せの法則という。自助努力もそうだ。自己啓発本が生まれるのには一つの前提がある。

《そもそも自己啓発本が生まれるためには、「出世しようと思えば出世できる環境」と、その環境の中で「出世したいと思う人」が大勢いることが前提条件となる。》

つまり社会の流動性と明るい未来がそこには必要だということだ。

エリート階級は少数者だが、その大多数は読書をする。つまり「教養」を身につけようとする。『ファスト教養』（集英社新書）は、その教養を、「大雑把に全体を把握するために表面的な説明になることもいとわれないコンテンツ」という。「話を合わせるためのツール」なのだ。労働者とことなり、「知識」のやりとりをする「かたまり」の側に所属しているわけだ。座をあたためる知識なので、「シンプルに考える」「複雑に考えない」ことが大事だ。コメントーターとして参与できればいいのだ。

ユニークな生き方を創出する新聞記者でもある近藤康太郎は『百冊で耕す』（CCCメディアハウス）に「速読」をすすめる。「速読とは、大局判断のことだ。」「必須なのは、第一に全体を見通せることだ。」という。そうすると「結びつかないものが、結びついている」。この結び合わせの技がコメントーターの力だ。

読書会をしていなかったら人を殺していたかもしれないと告白しながら、本を読み続ける人もいる（向井和美読書会という幸福）。「働いている人たちの現場」ではこんな人はいらないうら。

三宅香帆は、「シリアスレジャー」と呼ばれるお金にならない趣味を生きがいにする人々が、注目されているという。上流下流問わず、これはドロップアウトの人たちだ。

例えばそのようにドロップアウトした人たちが「まちの本屋」を始める。成功しないことを前提とした本屋だ。ここは「本」の最後の居場所であり、本が世に広まる始まりの場所であるかもしれない。

2025. 2. 19

(参考)

三宅香帆 『なぜ働いていると本が読めなくなるのか』

集英社新書 2024

ポール・E. ウィリス・熊沢誠・山田潤 『ハマータウンの野

郎ぐも』 1996

打越正行 『ヤンキーと地元』 ちくま文庫 2024

尾崎俊介 『アメリカは自己啓発本でできている』 平凡社 2024

レジー 『ファスト教養』 集英社新書 2022

近藤康太郎 『百冊で耕す』 CCCメディアハウス 2023

向井和美 『読書会という幸福』 岩波新書 2022

爰の定有